『日本霊異記』の異類婚姻譚

――神話から仏教説話へ――

小林　真由美

一

『日本霊異記』中巻「女人悪しき鬼に点(けが)され喰(く)噉はるる縁」第三十三は、美しい富豪の娘の身に起きた猟奇的事件の説話である。

鏡作造の娘万(よろづ)の子は、高い身分の者の求婚にも応じずに年を経ていたが、ある求婚者の「彩帛(しみのきぬ)（染色された絹布）三車」の贈り物を見て「腿(おもねり)の心をもち」、求婚を受け入れた。しかし、結婚初夜に、娘は頭と指一本を残して食われてしまった。男は恐ろしい食人鬼だったのである。

聖武天皇の世に、国挙(こぞ)りて歌詠(うた)ひて謂はく「なれをぞよめにほしとたれ　あむちのこむちのよろづのこ

南无南无や　仙さか文さかも酒持ち　のり法まうし　やまの知識あましにあましに」といふ。爾の時に大和国十市郡菴知村の東の方に、大に富める家有り。姓は鏡作造なり。一の女子有り。名けて万の子と曰ふ。いまだ嫁はず、いまだ通がず。面容端正し。高き姓の人伉儷ふになほ辞びて年祀を経。爰に有る人伉儷ひて忿々物を送る。彩帛三車なり。見て　聽の心をもちて兼ねてまた近き親ぶ。語に随ひて許可し、閨の裏に交通ぐ。其の夜閨の内に音有りて言はく「痛きかな」といふこと三遍なり。父母聞きて相談ひて曰はく「いまだ効はずして痛むなり」といひて、忍びてなほ寐。明日の暁に起き、家母戸を叩きて驚かし喚べども答へず。怪びて開き見れば、ただし頭と一の指とのみを遺し、自余はみな噉はる。父母見て、悚慄り惆懆て、娉妻に送れる彩帛を睠れば、返りて畜の骨と成る。載せたる三の車は、また返りて呉朱臾木と成る。八方の人聞き、集り臨り見て、怪びずといふこと無し。韓笫に頭を入れ、初七日の朝に、三宝の前に置きて斎食をす。すなはち疑はくは、災の表まず現れ、彼の歌は是れ表ならむ、と。或るいは神しき怪なりと言ひ、或るいは鬼の啖ふなりと言ふ。覆し思ふに、なほし是れ過去の怨なり。斯れまた奇異しき事なり。

二

この説話は、正体不明の男との結婚という点で、『古事記』三輪山伝説を想起させる。崇神天皇記によると、活玉依毘売という美しい娘のもとに、見知らぬ立派な男が通ってくるようになり、程なく身ごもった。

此の、意富多々泥古と謂ふ人を、神の子と知りし所以は、上に云へる活玉依毘売、其の容姿端正し。是に、

壮夫有り。其の形姿・威儀、時に比無し。夜半の時に、儵忽ちに到来りぬ。故、相感でて、ともに婚ひともに住める間に、未だ幾ばくの時も経ぬに、其の美人、妊身みき。（『古事記』崇神天皇）

父母は、娘の夫の身元を知りたいと思い、娘に、床の前に赤い土を散らし、「へその紡麻」を針に通して男の衣の裾に縫いつけさせた。明くる日、その糸をたどっていくと、三輪山の神の社に着いた。男の正体は三輪山の神で、活玉依毘売は神の子を宿したのだと知られた。三輪の神官の始祖伝説であり、三輪（三勾）という地名の起源譚である。

この型の伝説は異類婚姻譚に属し、三輪山型伝説といわれるが、それに類する伝説が、『常陸国風土記』那賀郡茨城里晡時伏山の条にもある。努賀毗古・努賀毗咩の兄妹がいたが、妹に姓名も知らない男が通ってくるようになり、やがて小さな蛇を生んだ。神の子と思い育てたが、どんどん大きくなったので蛇の子に父のもとに行けと告げた。子は泣きながら従者の童を所望したが、母に断られると、子は怒り伯父を殺して天に昇ろうとした。母が子に甕を投げ当てると、子は天に昇れなくなり、その峰に留まった。その子孫はそこに社を建てて、祭ることが絶えないという。

『肥前国風土記』松浦郡褶振峯の伝説は、途中までは三輪山型の展開を見せながら、凄惨な結末が『日本霊異記』中巻第三十三縁に通じている。褶振峯で弟日姫子が任那へ旅立つ大伴狭手彦を見送った五日後に、弟日姫子のもとに狭手彦によく似た男が通ってくるようになった。弟日姫子は男の上衣の裾に麻糸を縫い付け、たどっていってみると、蛇が頭を沼の岸に伏せて寝ており、下半身は人に化して沼の底に沈んでいた。従女からそれを聞いた家族たちが見に行くと、蛇の姿はなく、沼の底に娘の遺体が沈んでいた。

上代、日本各地にこれらのような蛇婿伝説が存在していたことが窺われる。蛇は水神であり雷神であり、恐るべき怪物の属性も有していたので、『肥前国風土記』のような怪奇伝説が語られることもあったのだろう。

『日本霊異記』中巻第三十三縁も、そうした蛇婿伝説の延長線上にあるのだろうか。寺川真知夫氏は、仏典の羅刹女や中国の小説の食人鬼の例を挙げ、中巻第三十三縁は、「三輪山型の伝承の型を用いているようにみえても、それは三輪山型伝説の内的発展・展開の結果として中巻第三十三縁があるのではない。仏教的立場からの、神怪の者の食人という恐ろしい事実を提示しようとの意図によって形成されている」と述べている。(1) 丸山顕徳氏は、中国の『獪園』第十五の、婚礼初夜に花嫁が魔物と入れ替わり、花婿が食われてしまうという「飛天夜叉」の説話との類似性を挙げ、中巻第三十三縁が中国の説話の系統を引いていると述べている。

万の子の話は、夜叉の人食いの伝承説話に、この地方の富家である鏡作造の娘を重ねて話をつくったものであることが分かる。また、恐ろしい、しかも珍しい話を好む人々の欲求に答えるために、この伝承は渡来人によって持ち込まれたものであろうと考えられる。(2)

寺川氏や丸山氏の述べるように、『日本霊異記』中巻第三十三縁の鬼は、仏教や中国小説の食人鬼の流れを汲むものであろう。日本国内の説話として翻案する際に、三輪山型伝説を受け皿にして取り入れたのだと思われる。よく知られた話型の語り出しを用いることで、その後をより衝撃的な展開にする効果がもたらされただろう。

『古事記』『風土記』の三輪山型伝説では結婚の理由については特に何も触れていないが、『日本霊異記』中巻第三十三縁では、万の子が男からの贈り物を見て「甌の心をもちて」と記している。この「甌」は、中巻「閻羅王の使の鬼召さるる人の饗を受けて恩を報ゆる縁」第二十五縁にも用例があり、「オモネリテ」の訓釈がある。(3)

閻羅王の使の鬼来りて衣女を召す。其の鬼走り疲れ、祭れる食を見て甑りて就きて受く。

（『日本霊異記』中巻第二十五縁）

観智院本『類聚名義抄』に「甑」の訓に、「フケル、オモネル、メツ」（法上一〇二）とある。「おもねる」はへつらう、追従するの意だが、「フケル」「メツ」の概念にも近いと考えられる。

『日本霊異記』中巻第二縁に「貪」という字に「フケル」の訓釈（国会図書館本）があるが、「貪」は、仏教では根本煩悩の「三毒（貪・瞋・癡）」の一つとされている。「他の財物に於ける悪欲を貪と名づく」（『倶舎論』巻第十六）。「貪欲」は「十悪（殺生・偸盗・邪婬・妄語・両舌・悪口・綺語・貪欲・瞋恚・邪見）」の一つでもある。

また、『類聚名義抄』の訓の「メツ」は「愛づ」であろう。仏教語の「愛」は執着であり、煩悩である。「貪愛」は「貪」の異名として仏典に頻出する。『霊異記』中巻第三十三縁の「甑（おもねる）」は、仏教でいう「貪愛」に近い概念であったと思われる。万の子は、男の贈り物を見て「貪愛」の煩悩に駆られたために、男に媚びなつき、受け入れたのだ。

見て甑の心をもちて兼ねてまた近き親ぶ。語に随ひて許可し、閨の裏に交通ぐ。

（『日本霊異記』中巻第三十三縁）

しかし、万の子が閨に迎え入れたのは、実は、恐ろしい悪鬼だった。仏典に、「鬼」との「交通」について次のような記述がある。

初に犯境に十あり。一に死屍未だ壊れず、二に鬼と交通す。三に畜生、四に人、五に諸親、六に女妹等、七に在家の二衆の五八戒を持つ等、八に出家の二衆の大戒を具する等、九に父母、十に聖人、羅漢の尼を犯す

等の如し。みな前は軽く後は重なること知るべし。（『梵網経菩薩戒本疏』巻第三）

『梵網経菩薩戒本疏』は、大乗菩薩戒である梵網戒を説く『梵網経』の注疏で、唐の法蔵の撰。奈良時代には日本にも伝来、普及していた。引用部分は梵網十重禁四十八軽戒のうちの第三重戒、婬戒（無慈行欲戒）の注解で、犯戒の境（対象）の軽重について述べている箇所である。「鬼」との「交通」は、傍線部のように犯境の二に挙げられている。

『梵網経』本文には、

若し仏子、自ら婬し、人を教へて婬せしめ、乃至一切の女人を、故に婬する事を得ざれ。婬の因、婬の縁、婬の法、婬の業あらん。乃至畜生の女、諸天鬼神の女、及び非道に婬を行ぜんや。（『梵網経』巻下、第三重戒）

とある。「諸天鬼神の女」とある。「女」とあるので男性側からの記述であるが、梵網戒は、老若男女、在家出家を問わない戒律である。女性側からみた場合は「諸天鬼神の男」と解していいだろう。「鬼」との結婚は、菩薩戒において禁止項目なのである。

すなわち、万の子が貪欲にかられて男を受け入れた行為は、菩薩戒を破る邪婬だった。万の子は咎なくして無邪気なまま鬼に喰い殺されたのではなかった。贈り物への貪欲、邪婬と悪因を重ねて、「悪しき鬼に点され喰噉は」れたのである。

『日本霊異記』中巻第三十三縁は、冒頭の不吉な流行歌が食人鬼事件の「災の表」であったとし、事件は「過去の怨」によるものであり「奇異しき事」だと結んでいるが、説話の核には、貪欲―邪婬―殺害という、娘の身

における悪の因果応報[4]があると読むことができるのではないだろうか。

三

三輪山型伝説は、伝説としての固定した場を離れて、昔話としても全国各地に広く語られてきた。昔話の分類としては、『日本昔話大成』によると本格昔話―婚姻―異類聟―蛇聟入―苧環型（一〇一A）になる。昔話の異類聟はさまざまな話型が全国に分布しているが、「異類」のほとんどが人間を欺こうとする動物や鬼などで、最初は欺かれたり陥れられて窮地に立たされた人間が、知恵で異類を欺き返し、人間側が勝利する結末が多い。

『日本昔話大成』で蛇聟入―苧環型として紹介されている「蛇聟入」（新潟県栃尾市）の筋をまとめると、次のようになる。

①器量よしの娘のもとに、身元のわからない男が通ってくる。
②親が不審に思い、娘に言いつけて、男の着物の裾に縫い針を刺させる。
③次の朝、血の垂れた跡をたどっていくと、洞窟の中に入っていった。
④痛みに苦しむうなり声と話し声が聞こえ、「人間のところに子を残してきたので心配ない」「しかし、人間が五月の菖蒲湯に入ると子供が砕けてしまう」と言っていた。
⑤家に帰って、娘を菖蒲湯に入れると、蛇の子が下りる。
⑥これが五月節句のいわれである。

①〜③は三輪山型伝説に相当しているが、④〜⑥は、三輪山伝説に付け足しをしたような展開である。関敬吾は『昔話と笑話』において、各地の苧環型諸例全体において共通する要素として、発端の三つの点を挙げ、その後は英雄誕生譚と「立聴型」に分かれていることを述べている。

一、未知の男が夜々娘のところに通ってくる。

二、親の助言によって、娘はその男の衣に針に糸を通して刺しておく。

三、翌朝、親または娘がたどっていくと糸は淵（洞窟、木の株）の中に入っている。

（中略）三つの発端の要素である不変部分を基礎として二つの型に分れている。そのひとつは英雄誕生譚の形式をとり、他は立聴型の形式である。（関敬吾『昔話と笑話』）

「立聴型」とは、三月の蓬酒や五月の菖蒲酒などを飲むと子が下る、あるいは湯をたてて入ると子が下るなどという異類同士の会話を立ち聞きし、その通りにすると子が下り娘は無事であるという結末で、現在最も多く採集されている普遍的形式だとする。

『日本霊異記』には、永藤靖氏が指摘しているように、[5] 立聴型の後半部分に類似する説話がある。中巻「女人大蛇に婚（くなか）はれ薬の力に頼りて命を全くすること得る縁」第四十一。河内国の裕福な家の娘が、桑の木に登って葉をこいていると、大蛇が木に登ってきた。女は驚いて木から落ちてしまったが、蛇が一緒に落ちて娘にまといつき交わってしまった。父母が薬師を呼ぶと、薬師は稷（きび）の藁を焼いて汁に入れて煮て、猪の毛を十把きざんで入れ、その汁二斗を娘の口に入れた。すると、蛇が体から離れ、蛇の子を皆おろすことができた。しかしその三年後に、娘はまた大蛇に交わられて死んでしまった。

この説話の結末は、立聴型の昔話と異なり、九死に一生を得たかのように思われた娘が、三年後に、また蛇によって死んでしまう。標題によると、薬の力を讃える説話だが、娘と蛇の因縁について次のように述べられている。

愛ぶる心深く入らば、死に別るる時に、夫と妻と父母と子とに恋ひて是の言を作していはく「我れ死なば、またの世にかならずまた相はむ」といふ。其の神識は業の因縁に従ひて、或るは蛇馬牛犬鳥の等きらに生る。先の悪しき契に由りて、蛇に愛び婚はれ、或るは怪しき畜生にせらる。（『日本霊異記』中巻第四十一縁）

娘の悪しき運命は、前世の愛執が業因だったというのである。夫、妻、父母、子に深く執着して、死んだら来世に会おうと契った者たちは、ある者は畜生に生まれ変わり、またある者は蛇に愛されることになるのだという。

この説話には、蛇が「畜生」であること、すなわち悪業のために畜生道に堕ちた存在であるという仏教的観念が示されている。仏教において蛇は神ではなく、畜生である。蛇に愛されること、または畜生として生まれることは、先世の「悪しき契」の結果だというのである。

前掲の『梵網経』無慈行欲戒に「乃至畜生の女、諸天鬼神の女、及び非道に婬を行ぜんや」とあるように、戒律でも畜生との淫行は禁じられている。『優婆塞戒経』にも次のようにある。(6)

若し非時・非処・非女・処女・他婦に於て、若し自身に属すれば是れを邪婬と名づく。唯だ三天下にのみ邪婬の罪あり。鬱単曰には無し。若しは畜生、若しは破壊、若しは属僧、若しは繋獄、若しは亡逃、若しは師婦に、若しは出家人、是の如きの人に近づくを名づけて邪婬と為す。（『優婆塞戒経』巻第六）

動物や鬼との異類婚は、仏教においては邪婬であり罪悪である。神話や昔話における異類婚姻譚との決定的な

違いである。昔話の蛇聟入りでは、娘側が異類やその子供を退治してめでたしとなるところを、『日本霊異記』中巻第三十三縁と第四十一縁では、娘が死んでしまう悲劇で終わるのは、仏教的解釈による異類婚説話だからである。

四

『日本霊異記』には、蛇聟入りのもうひとつの型である水乞型に類似する説話も見られる。中巻第八縁と第十二縁で、娘が、蛙を助けるために、心ならずも蛇に結婚の約束をしてしまうという話である。

『日本霊異記』中巻「蠏（かに）と蝦（かへる）との命を贖（あが）ひ生（いきもの）を放ちて現報を得る縁」第八。置染臣鯛女という「道の心純熟（もはらな）りて、初婬を犯さ」ない娘がいた。大蛇が大蛙を飲もうとしているのを見て、あなたの妻になるから蛙をゆるしなさいと言った。約束の七日後、蛇が本当にやってきたので恐ろしくなり、行基に相談した。すると行基は「汝免さるること得ず。ただし堅く戒を受けよ」といい、三帰五戒を受けさせた。その帰りに、鯛女は大蟹を持っている見知らぬ老人に出会い、衣類と交換に大蟹を譲ってもらい、放生してやった。八日目の夜にまた蛇がやってきたが、飛び跳ねあばれる音がして、翌朝見てみると、一匹の大蟹が、大蛇をずたずたに切り殺していた。

中巻「蠏と蝦との命を贖ひ生を放ちて現報に蠏に助けらるる縁」第十二は、第八縁の類話である。山背国紀伊郡の女人は、焼いて食われそうになっていた八匹の蟹を買い上げ、放生してやった。その後、大蛇が大蛙を飲むのを見て、自分が妻になるからゆるしてやれと言うと、蛇は蛙を吐き出した。妻になる約束をしてしまった女人

が行基に相談すると、ただ三宝を敬えと言われる。約束の日、大蛇がやってきたが、八匹の大蟹が大蛇をずたずたに切り殺し、娘に恩返しをした。

昔話で、蛇聟入―水乞型は『日本昔話大成』では一〇一Bに分類されるが、中巻第八縁と第十二縁により近い型として、異類聟―蛙報恩（一〇四A）と蟹報恩（一〇四B）がある。

「蛇聟入」（青森県三戸郡）、（『日本昔話大成』一〇一B蛇聟入・水乞型）

①長者が、自分の干上がった田に水を引いてくれる者なら、三人娘の一人を嫁にやると約束する。

②翌日、田に水を引いた者がいたので、三番目の娘が、嫁に行くことになる。

③娘は、針千本と千成りふくべと真綿千枚を持って嫁入りし、大蛇の聟を退治する。

④家に帰れない娘は、山の中で出会った蟇蛙におんば皮をもらう。

⑤おんば皮をかぶって長者に奉公する。

⑥おんば皮を脱いだところを長者の長男に見初められ、嫁になる。

「蛙報恩」（岐阜県高山市）、（一〇四A蛙報恩）

①爺さんが、蛙を飲み込もうとする蛇に、三人娘のうち一人を嫁にやると言って、蛙を助けてやる。

②三番目の娘が嫁に行くと言い、針千本と瓢箪とお経を持って嫁に行く。

③蛇が来たので娘はお経を読んで覚悟をしていると、蛙が仲間を呼んで蛇を殺して、恩返しをしてくれた。

「蟹報恩」（石川県珠洲市）、（一〇四B蟹報恩）

①百姓が、蛇に、田に水を引いてくれたら娘を嫁にやるという。

②その晩、若者に化けた蛇が、聟になりに来る。
③翌日また蛇が来ると、前に百姓が助けたことのある蟹が仲間を呼んで、蛇をこま切れにして殺して、恩返しをしてくれた。

『日本霊異記』の中巻第八縁と第十二縁が非常に似ていることに注目されるが、黒沢幸三氏は類似性について、説話として筆録される前に「口承に支えられた伝承期間」があるためで、布教僧が、行基説話として各地に語り歩く過程で生まれた類話を、二つの別話として景戒が採録したのだろうと推測している。(7) また、『日本霊異記』中巻第十二縁が特に「報恩」を強調していることについて、黒沢氏は、昔話は人間と動物との交渉を語るものが多く、説話文学の母体をなしてきたが、「『霊異記』において報恩譚が完全な形になるのは、仏教の慈悲や四恩の説の影響によるものと考えてよいだろう」と述べている。(8)

中巻第十二縁は、蟹満寺縁起譚として『三宝絵』『本朝法華験記』『今昔物語集』『元亨釈書』などに伝えられている。昔話の蛙報恩型と蟹報恩型は明らかに蟹満寺縁起譚に類似しているが、仏教説話が口承の昔話に摂取された一例として受け止められる。すなわち、昔話（人間と動物の交渉）→仏教説話（動物報恩譚→蟹満寺縁起譚）→昔話（蟹報恩）という、仏教説話と昔話相互の影響関係が見受けられる。

昔話と『日本霊異記』説話の大きな違いは、行基の勧めによる「受持三帰五戒」（中巻第八縁）及び「信三宝」（中巻第十二縁）のモチーフの有無であろう。

『日本霊異記』中巻第八縁の鯛女は、蛇に飲まれようとしている蛙を救うために、心にもない約束をしてしまったが、出雲路修氏は、その約束が、仏法の五戒に抵触することを指摘している。五戒とは在家信者が守るべき

戒で、殺生戒・偸盗戒・邪婬戒・妄語戒・飲酒戒である。もし鯛女が蛇の嫁になれば、邪婬戒、ならなければ嘘をついたという妄語戒を破ることになる。出雲路氏は、この説話が、昔話の世界とは「異質な価値観」である仏教思想に支えられていることを述べている。

（鯛女は）「五戒」を受持してのちにあらためて蟹を救い、蟹に報恩されて災厄を免れる。この説話構成それ自体が主張する「仏教思想」を、読みすごしてはならない。馬喰八十八や知恵有殿の活躍する昔話の世界や、猿婿入りの昔話の世界は、ここには、ない。それらとは異質な価値観に支えられた、「仏教昔話」の世界が、ここに創りだされようとしているのである。（出雲路修「誘う女」『説話集の世界』）

仏教説話は、神話伝説や昔話とよく通じ合いながらも、語られる内容は必ず仏教的価値観や思想に集約されるという、仏教説話としての同一性が確保されているのである。

五

異類婚姻譚は、異類である神と人間との結婚により、神の子が人間界にもたらされ、一族の祖となるという始祖伝説が原型であると考えられている。日本神話では前掲の三輪山伝説や、海幸彦山幸彦神話などが有名である。『古事記』によると、海神の娘・豊玉毘売命（とよたまびめの）は、火遠理命（ほをりの）（山幸彦）と結婚し、海辺に建てた産屋の中で「八尋鰐」の姿に戻って鵜萱草萱不合命（うかやふきあへずの）を産み、海の世界へと帰っていった。海の神女の本来の姿が大鰐だったのである。

三輪山の神である蛇も豊玉姫の正体である鰐も、仏教的立場から見れば、神ではなく「畜生」である。畜生との結婚は、「邪婬」。仏教説話における異類婚は、神話伝説や昔話における異類婚とは異なり、邪婬として「悪」の観念を負う。

『日本霊異記』上巻「狐を妻として子を生ましむる縁」第二は、狐女房（『日本昔話大成』一一六A～C）の我が国の文献上の最古の用例である。『日本霊異記』には、このように、異類聟譚だけではなく異類女房譚もあり、異類婚姻譚の基本的な話型がほぼ揃えられている観がある。注目すべきことであろう。異類聟に類する『日本霊異記』説話は皆「邪婬」として描かれていると解釈できるが、異類女房はどうであろうか。

上巻第二縁は、美濃国のある男が道で女と出会い、結婚し子供をもうけたが、ある日、犬にほえられて女は狐の正体を現した。女は子を残して去っていった。狐女房との間に出来た子は強力で足が速く、美濃国の「狐（きつねの）値（あたひ）」の祖となった。

始祖伝説ではあるが、上巻第二縁は神話としては語られていない。狐の女と結婚した男は、昔話の異類女房と同様に結婚の破綻を迎えたが、大きな悪報はなかったようである。しかし、その子孫が、中巻第四縁で怪力の悪女となって登場する。聖武天皇の世、狐の子の四代目の「三野狐」という力女は、美濃国の小川市で商人の品物を強奪することを生業としていたが、道場法師の孫娘にさんざんに懲らしめられ、市を追放されてしまった。『日本霊異記』の上巻、欽明天皇の世から、中巻の聖武天皇の世にかけて、異類婚は悪縁として子々孫々に伝えられるのである。[9] 上巻第三縁で元興寺の守護者として活躍した道場法師の子孫が、中巻において強力の貞女として伝えられたのとは対照的である（第四縁、第二十七縁）。上巻第二縁は、『日本霊異記』の異類聟説話と同様に、

狐は「畜生」で結婚は「邪婬」と捉えてよいものと思う。

六

祈はくは奇しき記を覧る人、邪を却りて正に入れ。諸の悪は作すことなかれ。諸の善は奉り行へ。

（『日本霊異記』上巻序）

というのが、『日本霊異記』の編纂意図であった。「諸悪莫作、諸善奉行」が原始仏教以来の基本的な仏教理念であることはいうまでもないが、この「善」「悪」とは、従来日本人が社会通念として保持していた倫理観ではない。仏教における「善」と「悪」である。

異類婚姻譚はさまざまな型が伝えられているが、古くは神と人との結婚神話であり、一族の始祖を異類の神にたどる伝説であったという。しかし、『日本霊異記』に収められている異類婚姻譚は、「鬼」「畜生」との結婚は邪婬であるという仏教的解釈をほどこして、仏教説話として再構成された説話群である。『日本霊異記』は日本古来の神話的世界を、仏教的価値観によって語り直し、仏教的世界に塗り替えたのだといえよう。

ほかにも、『日本霊異記』の中に、日本神話的な要素が随所にみられる。上巻第三縁には、空から墜落してしまう雷神が登場して、その申し子は、長じて仏教の守護者「道場法師」になった。中巻第七縁では、日本を「葦原中国」と呼び、閻羅王が待ち受ける冥界において「黄泉竈食」が行われるという記述がある。日本固有の信仰を、仏教的世界に取り込もうとする態度がみられる。下巻「産生みたる肉団女子と作りて善を修ひ人を化ふる

縁」第十九は、イザナキイザナミの産んだヒルコを想起させる肉塊の卵が、異形でありながら高徳の尼になり、聖の化身であったことがわかるという説話である。神話ではヒルコは生み損ないとして流されたが、『日本霊異記』では一度は山中に捨てられながらも父母に再び拾われ、聖人「舎利菩薩」として成長する。

『日本霊異記』は、「自(わ)が土(くに)」（上巻序）を、仏教的善悪の因果応報と、仏の霊験に満ちた世界に再構築しているのである。

七

『日本霊異記』中巻にはもう一話、異類女房に類するといえる説話がある。人間の男と吉祥天女像との交渉を語る説話である。

「愛欲をおこし吉祥天女の像に恋ひて感応して奇(あや)しき表を示す縁」第十三。和泉国のある優婆塞が、寺の吉祥天女の塑像に恋をして願い続けていると、とうとう夢の中で天女の像に交わった。あくる朝、吉祥天女像を見てみると、裳の腰に汚れの跡が染み付いていたという。

この説話の場合は、邪婬にはならないのだろうか。前掲の『梵網経』には、

乃至畜生の女、諸天鬼神の女、及び非道に婬を行ぜんや。（『梵網経』巻下）

とあり、その「諸天」に吉祥天女が含まれるかどうかが問題だが、『梵網経古迹記』の注解には次のようにある。(10)

言諸天者、魔女等反身為人婬比丘等。（『梵網経古迹記』巻下）

「諸天」とは、人に化けて比丘等をたぶらかす魔女のことで、吉祥天女は該当しない。『梵網経古迹記』は、『日本霊異記』執筆の際に景戒が参照していたと思われるので、[11]『梵網経古迹記』に従い、優婆塞の行為は罪ではないと解釈すべきであろう。よって、『日本霊異記』中巻第十三縁の吉祥天女説話は、邪婬説話ではなく、奇瑞に満ちた霊験譚として語られているのだと考えられる。

諒に委る、深く信はば感きて応へずといふこと無し、と。是れ奇異しき事なり。涅槃経に云ふが如し「多婬の人は画ける女にすら欲を生す」とのたまふは、其れ斯れを謂ふなり。（『日本霊異記』中巻第十三縁）

【注】

(1) 寺川真知夫『日本国現報善悪霊異記の研究』（和泉書院、一九九六年）参照。

(2) 丸山顕徳『日本霊異記説話の研究』（桜楓社、一九九二年）参照。

(3) 『日本霊異記考証』巻中第二十五縁「魘」の注記に、「第三十三条ニモ亦此ノ字有、今昔物語並ビニ同ジ。類聚名義抄字鏡集此ノ字ヲ載セテ同訓。然諸字書見ルコト無シ」とあるように、「魘」は観智院本『類聚名義抄』や『今昔物語集』にもみられるが、管見でも漢籍に見出しておらず『大漢和辞典』にも掲載されていない。

(4) 寺川氏前掲書（注1）にも、「中巻第三十三縁では娘と両親は物欲にとらわれて鬼につけこまれ、娘が禍を受ける設定になっている。ここにはそれなりの仏教的意図にそった設定があったとみなければならない。」とある。また、『今昔物語集』巻第二十「財ニ耽リテ、娘ヲ鬼ノタメニ噉ゼラレ悔ユル語第三十七」は『日本霊異記』中巻第三十三縁の類話だが、男の贈り物に「父母此レヲ見テ忽ニ財ニ耽ル心出来テ」、娘を鬼に嫁がせて食われてしまう。主

体が娘自身ではなく父母になり、「此レヲ思フニ、人財ニ耽リ魘ル事ナカレ」と、「貪欲のために全てを失う」という、昔話の隣の爺型などに多いテーマになっている。

(5) 永藤靖『日本霊異記の新研究』(新典社、一九九六年)参照。

(6) 『新古典文学大系　日本霊異記』中巻第八縁の脚注に『優婆塞戒経』のこの箇所の指摘がある。「男子の在家信者が畜生と交わることは邪婬とされた(優婆塞戒経・業品)。女子の在家信者の場合も同様であろう。不邪淫戒を犯すかのごとき約束である。」

(7) 黒沢幸三「霊異記における類話の考察」(『同志社国文学』一九七〇年五・六月)参照。

(8) 黒沢幸三「蟹満寺縁起の源流とその成立―民話の伝説化―」(『国語と国文学』一九六八年九月)参照。

(9) 拙稿「道場法師系説話の善悪応報」(小峯和明・篠川賢編『日本霊異記を読む』、吉川弘文館、二〇〇四年)参照。

(10) 石田瑞麿『仏典講座14　梵網経』(大蔵出版、一九七一年)には、「諸天鬼神の女」の経文について、

天や鬼神の場合は現実味が欠けるが、明曠が鬼神について「自らの心中にかの身を現ずることを請ひ、非梵行を行ず」という説明からすれば、架空の女と淫を行ずることと見てよい。『日本霊異記』中巻の、「愛欲を生じ、吉祥天女の像に恋ひ、感応して奇しき表を示す縁第十三」はこの類と解してよかろう。(第三重戒)

と、明曠『天台菩薩戒疏』による解釈が述べられている。

(11) 露木悟義「霊異記引用経典の考察」(『古代文学』第六号、一九六六年十二月)参照。

この論文は、二〇〇六年四月十五日、仏教文学会支部例会(於大正大学)で「神話から仏教説話へ―『日本霊異記』

中巻第三十三縁考ー」の題目で研究発表した内容にもとづいて執筆しました。米山孝子先生はじめ、貴重なご教示を賜った諸先生方に、深く感謝し御礼を申し上げます。